

## 温暖化がコムギ眼紋病の発生を減らす

国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構 本部 たけ竹 うち内 とおる 徹

### はじめに

コムギ眼紋病は *Oculimacula yallundae* (異名: *Tapesia yallundae*, 不完全世代: *Pseudocercospora herpotrichoides* W-type) および *Oculimacula acuformis* (異名: *Tapesia acuformis*, 不完全世代: *Pseudocercospora herpotrichoides* R-type) によって引き起こされる病害で、世界各地のコムギ栽培地帯で発生している。我が国では、1983年秋田県大潟村において(古屋, 1984), また時期をほぼ同じにして北海道でも美瑛市および滝上町で発生が確認された(宮島・斉藤, 1984)。その後、北海道における本病の発生は拡大し、1988年にはコムギ栽培地帯のほぼ全域の10支庁管内の99市町村で発生が確認された(尾崎, 1990)。我が国でコムギ眼紋病の発生が確認されたのは、秋田県と北海道だけである。

本病はコムギの地際葉鞘や茎に眼紋状の病斑を形成する。病斑が進展すると茎基部が腐敗して早期倒伏の原因となり(図-1), 被害は著しいことから、北海道のコム

ギ栽培において大きな問題となった。

本病が北海道で発生した背景には、1970年に始まった水田転換政策が関係している。水田転換畑では使用する作業機械や栽培の省力性からコムギの栽培が急増し、コムギを連作する圃場も増えた。また、畑作地帯においても経営規模の拡大に伴い、省力栽培が可能なコムギの過作傾向が進んだ。このようなコムギの連作または過作が増加する状況で、土壌伝染性のコムギ眼紋病の発生および被害が拡大していくこととなった(図-2)(竹内, 2020)。

なお、本稿は2026年1月に開催された日本植物防疫協会シンポジウム「温暖化がもたらす新たな病害虫発生リスクを考える」の講演内容の一部をまとめたものである。

### I コムギ眼紋病の発生生態

コムギ眼紋病は発病圃場における前作のコムギ罹病残渣上に形成された分生子が第一次伝染源となる。分生



図-1 コムギ眼紋病によるコムギの倒伏

Global Warming Reduces Wheat Eyespot Disease. By Toru TAKEUCHI  
(キーワード: コムギ, 眼紋病, 温暖化)